

元号が刻む句読点とキーワード

天皇陛下の退位が、12月1日の皇室会議の決定を受けた8日の閣議で、2019年4月30日と決まった。今年の6月に成立した特例法で、退位の日を定める前提として、首相が皇室会議の意見を確かめるように義務づけられていた。それに基づいての皇室会議だったわけだが、安倍晋三首相の示す4月30日案を出席者全員が受け入れ、退位の日は事実上決まったという。

平成という時代は、これによって残り1年5カ月ほどになってしまったのだが、この間にメディアでは「平成とはどのような時代だったか」という記事が掲載されていくことだろう。私自身、この論には関心があり、既にいくつかの媒体から具体的に検討してみたらどうだろうかといった誘いも受けている。しかし私は、平成という時代は軽々に論じられるべきではなく、より近代日本の歴史を踏まえながら多角的に論じられるべきではないかと思う。

これまでも書いてきたのだが、昭和という時代は三つのキーワードで語る事が可能である。そしてこのキーワードには二つの意味が重ね合わされているのだ。

- (1) 天皇（神格化した天皇と人間天皇）
- (2) 戦争（軍事主導と非軍事主導の体制）
- (3) 国民（臣民から市民への変化）

このキーワードは、戦後にあっては「人間天皇」「非軍事体制」「市民」といったプラスのイメージがあり、それが平成につながっているといえるのではないか。そしてこの三つのキーワードに対して「平成」はどう語りつがれるだろうか。つまり平成もまた三つのキーワードで語る事ができると考えてみたらどうなるのか。それを列記してみよう。

- (1) 天皇（昭和の清算としての追悼・慰霊、そして象徴天皇制の確立）
- (2) 政治（55年体制の崩壊と小選挙区制による新たな議会政治）
- (3) 災害（虚無感など災害史観の克服と人災事故へのあいまいな取り組み）

平成という時代はつまるところこの三つの組み合わせで、時代の全体的状況をつかむことができる。たとえば、「天皇は昭和の戦争を、皇后と共に追悼と慰霊という形で歴史的な決着をつけつつ、そのことを踏まえて国民と共に歩む象徴天皇制をお二人で創造していった」という言い方ができる。昨年8月のビデオメッセージは「退位」も重要な訴えだったと思うが、同時に象徴天皇というイメージをどのように理解し、いかなる思いで形づくってきたかを国民に伝えていた。

平成という時代の天皇は、これまでの天皇と異なって、ご自身で天皇像を確立した初めての天皇ではないかとも考えられる。

政治の面で平成を語るならば、55年体制の崩壊（1993年の非自民各派による細川護熙内閣の誕生）により、平成流の政治が始まった。結論風になるが、この政治は理念や思想が失われ、ひたすら小手先だけの政治技術に陥っている。そのために重大な問題が起こったときに対応できるのかといった不安を抱えている状態とってよい。

立法府での議論不足、人間性を疑いたくなるような政治家の暴言、さらには政務活動費の不明朗な着服、こうして数え上げていくといくつもその劣化の状況が指摘できる。これらが「因」となって、いずれ「果」が明らかになるのではとの懸念さえ生まれてくる。

私たちは元号を用いることで、時代区分を行い、自らの生きている空間を確認することができる。その意味で、天皇の代替わりは、句読点と考えてもいい。いうまでもなく句読点には、言葉と言葉の間にひと呼吸を置いて、その流れをつないでいく役割がある。文章の流れを一度切って息つきをして、次の一文をしたためるのだ。

今、平成から次の時代へと元号が変わることによって、私たちは改めてこれまでの文章の流れを整理して、

句読点を打つことが必要になる。私の説く三つのキーワードは、その試みでもある。平成のキーワードの中では、国民（市民）の姿が希薄である。受け身になりすぎていて、政治状況や災害史観を克服するより積極的な発言姿勢をもたなければというのが教訓のように思う。

平成の次の元号の時代は、どのようなキーワードが予想されるのだろうか。私は次のように考えている。

（１）天皇（平成の天皇像を受け継ぐ一方で、国際社会における新しい天皇像）

（２）人間（知性、理性を目指す教養型と科学技術主導で主体性を失う受動型）

（３）国際社会（国際人としての日本人像とナショナリズムの均衡） いずれにしても昭和や平成とは異なった価値観が生まれてくるのではないだろうか。私はいずれ「王室・皇室サミット」が開かれると想定しているが、その価値観の下で作られる新しい天皇像は、そこで主役になり得るのではないかと思う。